

図画工作教育に求められる 自己認識の過程を重視した授業実践

—道徳的価値の内容「個性の伸長」との関連性に着目して—

曾我 市太郎（学術研究所）

A Classroom Practice that Emphasizes the Process of Self-recognition Required for Art and Craft Education : Relationship with the Moral Value Content “the Growth of Individuality”

Ichitaro Soga

Kamakura Women's University Research Institute

Abstract

This study aims to demonstrate the educational potential of the relationship between the awareness of the change of “individuality” in the learning activities of elementary school art and craft and “the growth of individuality”, which is a moral value content. We examined the situation of “the growth of individuality” from both subjective and objective perspectives by observing the expression process of two subjects, painting and printmaking, for upper-grade elementary school students, and by introspecting through worksheet-based artwork appreciation and self-evaluation. The results revealed that the students who had prosocial awareness based on moral values and who had a certain degree of “perseverance” and “adaptability” for learning applied those abilities in their artistic expression in art and craft and showed high-quality learning outcomes that reflected their insight into the change and growth of their individuality.

Key words : drawing, crafts, education, moral values, developing individuality

キーワード：図画工作教育、道徳的価値、個性の伸長

1. 研究の目的と背景

1—(1) 研究の目的

本研究の目的は、図画工作科の学習活動と、道徳的価値内容のひとつである「個性の伸長」との関連性について、その教育的可能性を実証するこ

とである。図画工作科における個性の育成についての先行研究は、青木（2022）が朝鑑賞を通してお互いを認め尊重し合う子どもの育成への研究を行い、その効果を報告している。栗木（2012）は美術教育における個性の言語的な位置づけや用法など、学習指導要領解説の比較を通じた研究を

行っている。

本研究では、先行研究では扱われていない道德的価値の内容「個性の伸長」と2種の絵画表現との関連性に主眼を当て、その教育的な可能性を探る。

研究の目的に迫るため、小学校高学年を対象に絵画・版画表現の題材授業実践を行い、教材としての有効性を検討した。代表的な事例の紹介をもとに、表現と作品の鑑賞を通したワークシートの考察から、道德的価値との一応の関連性が認められたが、今後に向けて、図画工作科における道德性の多角的視点の構築と指導の検討が課題となった。豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を目指して行われる学校教育では、図画工作科においても学校教育が担う道德教育の一面に関わっていると捉えられることから、双方の相互関係と、本学の建学の精神に基づいた人格形成の創造への過程にある図画工作科の教育学的な考察を進める。

1—(2) 研究の背景

筆者は鎌倉女子大学初等部（以下、初等部）において主に図画工作科の指導に携わってきた。初等教育のあらゆる教科等において、図画工作科の持つ特色や必然性とは如何なるものかという問いを掲げ教育活動を重ねてきたなかで、教科の特殊性とともに、単独では切り離せられない要素、すなわち、鎌倉女子大学の建学の精神という根本理念を背景として「教育活動全体を通じて行う」ことを基本とする道德教育との関連性をいかに具現化し、図画工作科本来の目的や特性と融合させた教育が実現できるかという本質的な課題に行き着くことになった。

図画工作科の主な目標は、表現と鑑賞を通して児童の創造的な資質・能力を育成し、豊かな情操を養うことで人格形成に寄与するものである。表現の活動は、自分のイメージを持って材料や用具に働きかけ、絵を描いたりものを拵えたりすることと、自然や作品など周囲の対象や事象に関心を抱くことやつくられたものの表現の意図を探ろうとする鑑賞活動などである。

児童は高学年になるとともに、図画工作科の中

でも観察力に基づく具象的な絵を描くことに対する苦手意識が高まる。降旗の先行研究からも、学年が上がるにつれ苦手意識が増えていく傾向があると指摘されている。¹⁾（降旗2015）また「こうした状況は、子どもたちがおかれている受験などの社会的状況が大きく影響していると考えられる。」²⁾（波多野2019）とあるように、中学受験と無関係の教科に対する選別意識が現れてくることがある。さらに、思春期特有の心理状態も相まって、それまではどの教科にも懸命に向き合ってきた児童でも、精神的な緊張や逼迫感に起因する学習態度や意欲の低下がみられ、能力を十分に発揮しきれない状態になることがある。しかし逆に、受験の前日でも平常通りに登校し、どの教科にも意欲や姿勢を変えず取り組む心身の安定した児童が少なからずいることも事実である。著者の経験上、受験期であっても学校で多くの仲間と遊び、学び、切磋琢磨できる環境で、道德的価値に基づき自らを調整できる児童は、むしろそれまで以上に造形表現への熱意と創造の喜びを味わって、自己評価の高い作品を生み出しているように見受けられるのである。なお、本研究では個人の道德性を引き上げる「手段」として図画工作教育を扱っているわけではないことを述べておく。

初等部の教育目標は、建学の精神である「感謝と奉仕に生きる人づくり」「人・物・時を大切にすること」「ぞうさんと辞書をもつところ」を基調とした上で、児童自身が生涯にわたり自分らしさとなる「個性」を発揮し、知性や感性、身体を働かせて社会に貢献できる品格を備えた人格を形成するための礎を、6年間の学校生活の諸体験を通して主体的に創造していくことにある。

この「人・物・時を大切に」という目標は、とりわけ図画工作科との結びつきが強い性質をもつ。図画工作科では様々なイメージを創造的に表現するために他者との交流や環境の活用、物的材料との関りが主たる要素であるため、「人・物・時を大切に」の目標には、とりわけ指導者として教科との親和性による深い共感と尊重意識を持ってきた。

2020年度のコロナ禍を境に、物質の飽和と大量

消費とともに情報化は急速な発展へと進み、人工知能（AI）などに関する記事が毎日のように新聞やニュースで報じられ、人間としての知性や感性の在り方、倫理観、社会の見直しを問われている。新しいテクノロジーが日常を侵食しながら、進化とも迷妄ともいえる状況を顕現させている知識基盤社会の潮流に直面している子どもたちには、今後とも続いていく世界の変化と自身のライフステージに対応できうる逞しさや創造性など、多岐にわたる能力が必要となり、その育成を担う学校教育の責任は大きい。小学校においても、カリキュラムマネジメントにおける各教科等横断的な教育の実現が求められており、学校の教育活動全体を通じて行う道徳的活動は、逞しく、創造性を発揮してしなやかに未来を生きていく子どもを育成する視点からも重要である。しかし、何をもって成果を見出すと言えるのだろうか。教育の成果は即時で明確に見えるものではない。

筆者は専科教諭であることから、学級担任として道徳科の指導にあたった経験はないが、道徳教育はあらゆる学校教育を通じて行われ、その要である道徳科の授業の中で主に学級担任から一定の教育を受けていることを前提に図画工作科での指導を担う立場にある。『平成29年告示学習指導要領解説 特別の教科道徳編』（以下、本稿では道徳科指導要領と表記）のうち、道徳的価値の内容には後述する「個性の伸長」の他に、「希望と勇氣、努力と強い意志」「真理の探究」「感謝」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」など、特に図画工作科との関連が強い項目がある。本稿では道徳科で扱われている道徳的価値の項目から、「A 主として自分自身に関すること『個性の伸長』」に着目し、図画工作科の題材と接点が密接な面にアプローチを図り、児童一人一人が図画工作科の担う造形的創造性の追求を実現できるようにしていきたい。

1-(3) 研究方法

本実践では6年生のうち4名の児童を研究対象に選んだ。題材におけるモチーフの選択や構成、色選び、絵の具の混色と水量調節などの視点からそれぞれを象徴的な傾向のタイプとして扱った。

高学年という発達段階にある児童自身が「個性」というものをどう捉え、その「個性」がどう変化し、伸びているかをワークシートへの記述などから振り返る。

2. 図画工作科と道徳的価値

2-(1) 図画工作科の目標と内容

『平成29年告示小学校学習指導要領解説 図画工作科編』（以下、本稿では図工科指導要領と表記）の目標をまとめると、図画工作科は、表現や鑑賞の活動を通して造形的な見方や考え方を働かせ、形や色などと豊かに関わりながら情操を養い、人格形成を図ることを目標の礎としている。

児童が主体的に様々な対象と関わり合い、図工科指導要領の分類上の「A 表現」や「B 鑑賞」などの題材を通した造形活動から未知の創造性を見出し、掘り起こしていく過程に教育的価値がある。なにかを見る、描く、つくるという感覚や身体活動の連続で、「表出・表現をしてみても初めて気付く自分」³⁾に出会う体験を重ねていく。普通教育における造形的表現活動には、材料や用具を媒介しイメージを具体化・対象化することや、鑑賞活動を繰り返していくなかで、創造性が育まれていくということが希求されている。

詳細は後述するが、本研究で扱う題材は「絵に表す活動」のうち、対象を観察して本質をつかみ、水彩などで描く内容と、過去の経験や記憶、未知のイメージを統合し構成して木版画で表す「版に表す活動」の題材が中心である。

2-(2) 道徳教育との関連

図画工作教育と道徳教育との関連を辿ると、図工科指導要領に示される「道徳教育の目標に基づき、道徳科などとの関連を考慮しながら、第3章 特別の教科道徳の第2に示す内容について、図画工作科の特質に応じて適切な指導をすること。」

「つくりだす喜びを味わうようにすることは、美しいものや崇高なものを尊重する心につながるものである。また、造形的な創造による豊かな情操は、道徳性の基盤を養うものである。」⁴⁾とあり、図画工作科の全般的な学習の中に、道徳教育への

視点が含まれている。また、中島（2019）は「道徳とは一人ひとりの違いを大切な価値として認めていくことにあり、〔中略〕その意味では、図画工作（美術）科において、子ども一人ひとりの表現の違いとそのよさをめざとく見出し、それを伸ばし共感・承認し合う指導が重要である。」⁵⁾と述べている。造形的表現の様々な題材には相応の制作順序があり、多種の材料や用具が登場する。伝統文化に根差した技法の秩序や「人々の英知と努力で私たちの手元に辿り着く」様々な物的材料に触れ、大切に思うことはすなわち「道徳的価値行為」の実現であるといえる。

道徳科指導要領の第2章「道徳教育の目標」を述べると、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと。」⁶⁾また、各教科等と関連をもたせた指導として「〔中略〕各教科等と道徳科の指導のねらいが同じ方向であるとき、学習の時期を考慮したり、相互に関連を図ったりして指導を進めると、指導の効果を一層高めることができる。その際、各教科等と道徳科それぞれの特質が生かされた関連となるように配慮することが大切である。」⁷⁾「各教科等で行う道徳教育としては取り扱う機会が十分でない内容項目に関わる指導を補う補充や、児童や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深める深化、内容項目の相互の関連を捉え直したり発展させたりする統合の役割を担っているのである。」⁸⁾などがあり、各教科等と働き合う要素を見出すことができる。図画工作科における道徳的行為については、自らの知性と感性、心身との連動、創造的想像力を働かせ、自身の個性を育むだけではなく、気持ちのよい創造の環境を維持するために公共心もち協力して掃除を行う、困っている人がいたら教え合い、助け合おうとする思いやり、善悪の判断、節度ある行動、伝統と文化の尊重など、道徳科が示す内容項目と連動している具体的場面が数多くある。こうした意識と

行為は統合され、様々な場面で他者と関わり合うことで各人の道徳性の深化に結びついていくと考えられる。

2-3) 道徳科「個性の伸長」との関係性

図工科指導要領では、個性について「長所・短所」という表現では扱われていない。「内容の取扱いと指導上の配慮事項」においては、「児童が個性を生かして活動することができるようにするため、学習活動や表現方法などに幅を持たせるようにすること。」⁹⁾と肯定的な意味が与えられている。表現や鑑賞を幅広く捉え、児童が自分に適した表現や材料などを選ぶ自由性を認め、一人一人が自分の思いで活動できるようにその表現を励ますということである。また「各活動において、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすること。」とあるが、ここでは、様々な学習の過程で、友人と互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすることの重要性が説かれている。自分に存在する個性が他者にも同様にあり、また他者からみた自分の個性はその他者の心に存在する。そして、よさや個性には違いがあり、どれも大切にされるべきものであるということを教師の指導にも求めている文言である。しかし、道徳科で扱われている通り、人は誰しも長所や短所をもち合わせており、これらがすべて混沌となっている総体を個性と言いつけるのではない。人は常時それらと向き合い、課題があれば少しでも改善や解決が図れるように方策を施し、調整をして生きているのではあるまいか。

2-4) 個性の捉え方

個性とは、いったい何を意味するものか。「個性が強い」「個性的な作風」など文脈や使う場に応じて意味合いが違ってくるが、言語上の定義としては、「ある個人を特徴づけている性質・性格。その人固有の特性・パーソナリティ」¹⁰⁾、「(individuality) 個人に具わり、その個人を他の個人と異ならせる性格」¹¹⁾などがある。〔共通事項〕の指導について「第5学年及び第6学年においては、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを捉えること。」¹²⁾各活動について「互いのよさや個性などを認め尊重し合うこと。」¹³⁾「指導に当たっ

ては、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、〔共通事項〕に示す事項を視点として、感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする、言葉で整理するなどの言語活動を充実すること。〕¹⁴⁾が見られる。図画工作教育における個性の解釈については、詳細な先行研究¹⁵⁾¹⁶⁾があるが、前述の図工科指導要領にある文言を辿らずとも、教師であるならば児童の数だけ個性があることは学習の過程や作品を見れば明らかである。児童に備わる個性を尊重した筆者の考えとして、児童には学習者としてのみならず、「作者」としての意識をもつこと、教師はその意識を尊重することが、個性を捉える起点になると考える。

2-(5) 道徳的価値の内容「個性の伸長」

個性の伸長は、自分のよさを生かし、さらにそれを伸ばし、自分らしさを発揮しながら調和のとれた自己を形成することである。¹⁷⁾道徳科指導要領の解説には、「内容A 主として自分自身に関すること」のうち、「4 個性の伸長」第5学年及び第6学年「自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと」とあり、個人特有の特徴や性格を個性と捉え、その個性の伸長を図るために積極的に自分の長所を伸ばし、短所を改めることに関する内容項目が扱われている。この内容における個性の特徴とは、他者と比較して特に自分の目立つ点と捉えるが、それは長所ばかりでなく短所も含むものでもある。自分の特徴をよい方向で伸ばしていけば長所となり、苦手なことの改善を図らなければ短所となることもある。¹⁸⁾と述べられている。

2-(6) 建学の精神を礎として

建学の精神が学校生活のあらゆる場面に受け込み、児童の発達段階に応じた適切な指導により人格の形成が行われることは、本学の教育の基調である。人・物・時に対し感謝をもち、尊重して関わることが、図画工作科で養う心の育成とも重なるものであるといつてよい。なかでも人を大切にする筆者なりの解釈に基づく指導理念として、自らに備わった個性の一面である「目、頭、手」などの諸器官の働きを連動させ、「心」の動きを感じ

ながら創造の過程で往還し、相乗的に諸能力が育つように指導を図っている。唯一無二の自分という存在に与えられた身体的、機能的な要素は、多くの他者にも与えられているものである、こうした真実を大切にし、自らで育てていくことは、人を大切にする精神形成に繋がるものである。

3. 2つの題材実践における検証

題材はともに「絵に表す活動」の領域であり、具象的な主題を構成材料として、水彩絵の具による表現が中心となることから、児童の個性の伸長を把握しやすいと考えられるために本題材の実践を対象とした。

3-(1) 研究対象と実践方法

初等部に在籍する6年生児童59名（作品を提出した児童）より4名（女子3名、男子1名）を選出した。図画工作科の授業で5年生から6年生までの間に制作された2種の題材「自分を見つめて（水彩による自画像）」「心の楽園／思い出のページ（一版多色刷りの木版画）」の表現を基にした制作の経緯と制作後の振り返りにあたって記述したワークシートの内容による一連の造形的表現活動を主対象とした。4事例の選出にあたっては、表現時において材料や用具の扱いが相対的に見て多様な要素が見られ、制作後の振り返りワークシートの記述に具体性が読み取れた児童をその理由とした。

3-(2) 倫理的配慮

本研究は、調査の趣旨を記載した文書を学校長と担任教諭に提示し、承認を得てから対象児童の同意と保護者の許諾を得て行った。

3-(3) 2つの題材

題材1 「自分を見つめて」 2022年9月～10月末にかけ図工室で実践した。

この題材は、鏡に映した自分の姿を描く活動を通して、観察力を高め、見えたことや感じたことなどを形や色で表す。5年生は児童画発達段階の諸説のうちの11～12歳の区分にあたる。V.ローウェンフェルド（V.Lowenfeld）の分類¹⁹⁾では①「写實的傾向の芽生え（9～11歳）」と②「疑似写

実的段階（11～13歳）」に該当する。他にも、H. リード、リュケ、シリル・パートなどの諸説が挙げられるこの段階は、①心身の成長に伴って客観的な思考が高まり、それまで描いていた主観的な世界から、現実には自分の目で見える世界を描こうとする特徴と、②知的能力の発達に伴い、観察力、判断力が高まる。正確に再現的な表現を行うという傾向がみられる反面、自由な発想で描くことが減少していく。と学説上は区分されるが、社会の変化や背景、生活習慣など様々な影響により児童は連続的かつ動的に変化していくので、すべての言説の適用は当てはまらず、相応に個人差がある点には留意が必要である。

自画像に取り組むことそれ自体が、自分の発見であり対話であるため、自己の存在や個性に焦点を当てることで道徳的価値としての「個性の伸長」とも繋がっていると考えられる。

まず、制作にあたっては集中力の維持が求められる本題材に入る前に、緊張をほぐし意欲を発揚させることを目的として、色遊びの要素を取り入れた各種のモダンテクニック表現を行った。スポンジやストロー、手指に絵の具を画面に塗りつけて、開放感とともに自分の好きな表現を探り、スモールステップで興味を高めながら自画像の入り口に誘うよう意識づくりに努めた。続いてクロッキー用紙に柔らかめの鉛筆（2B～4B）で、大まかな頭部の大きさの目安を画面に記してから、目→眉→鼻→口→耳など顔全体の輪郭や頭髮と部分に注視させながら全体とのバランスをみてデッサンを進める。【図2①・②】当時はコロナ禍があり、全校児童がマスクをしていた時期である。顔の半分をマスクが占める自画像が揃うことになった。顔の一部となったマスクは色とりどりであるが、大きな色面になりその色自体が作品の印象を決定付けるため、マスクの固有色にとらわれず、自由に彩色してよいという指導をあらかじめ行った。

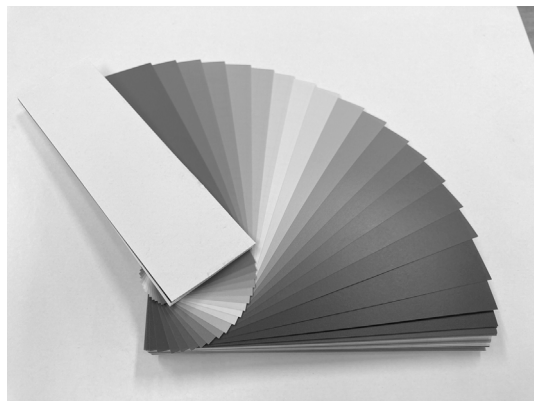
3-4) 考える用具としての画材

①練りゴム

鉛筆デッサンの際に使用する練り状のゴムである。デッサンの線や色の調子に対し、画面に押し

付けて薄く消す過程で、前の線跡や調子を残しながら徐々に新たな線を重ねて形を絞り込んでいく効果がある。児童にとって消し具は間違った線を「抹消」するための用具であるが、形をどう探り、捉えるかという考える画材としての練りゴムの効果を実感させるため、デッサンでは適切な場面で貸与して使用する。

②新配色カード129 a 【図2】²⁰⁾

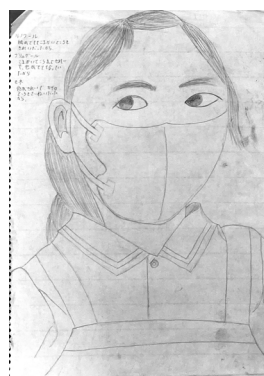


【図1】

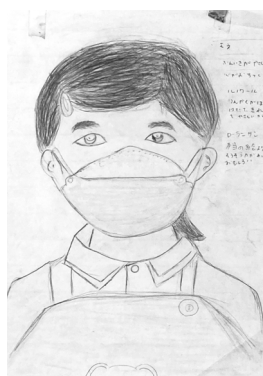
児童には4年生時に配付した用具である。仕様は、ビビッドトーン、ディープ、ダーク、パール等の有彩色8トーンと、各12色相、無彩色9段階を掛け合わせて生成される129色を、34×120mmの色紙片に束ねたものである。豊富な数の色相を視覚で認識することで、主体的に色と関わり、彩色時の配色を考えることが可能になる。掌に収まる単語帳のような束から豊富な色彩が広がる様は誰もが心躍るだろう。児童はこの配色カードを受け取ると、本能的に好きな色を探したり、好みの色の配列を見付け友人と話し合ったりしている。ある程度の英語の知識があれば色名も理解でき、どの色が含まれているか組成が分かるため、色彩における意思を共有できる役割がある。例えば、「この部分は緑色にしたい」という意志表示があった場合、「緑はたくさんの種類があるけど、どういう緑がいいの？」と配色カードをもとに問いかける。カードの裏に「ビビッドイエローグリーン」とあれば、「ビビッドは鮮やかなという意味です。ではイエローの意味は？」と問えば「黄色」、「グリーンは？」と問えば「緑」、と殆どの児

童は返してくる。言葉の意味が分かり色数が認識できれば、次は該当する絵の具をパレットに出し、カードの色に近づけていく工程を児童が行えるような支援が可能である。他に「ブライト（明るい）」「パール（薄い）」「グレイッシュ（グレーがかった）」などの単語は授業の過程で全体や個別の指導で伝達している。色選びは感性を流動的にはたらかせ、個性に気付く活動でもある。未知の色と出合わせ、自分に何かができそうだという動機づけにも繋がる。

以上、練りゴムや配色カードなどは小学校で扱われる画材としては必ずしも一般的ではないが、今回の授業実践では個性に基づく創造の場面において、自己との対話を深めるために有効であると考え、児童に扱い方を指導して使用している。また、図工科指導要領では「多様な材料や用具の経験があり、表したいことに適した材料や用具を選んだり、表現方法を組み合わせて表したりするなどこれまでに身に付けた技能を生かして表す姿」²¹⁾とあり、児童が過去の体験で得た知識と材料や用具との組み合わせによる新たな技能の形成の重要性を示唆している。



【図2①】



【図2②】

3-(5)

題材2 木版画（一般多色刷り）テーマ「心の楽園／思い出のページ」2023年2月～4月にかけ図工室で実践した。

版画は版を用いた絵画であり、独特の技法を通して豊かな絵画表現の世界を広げる。主に4つの版種（凸版、凹版、平版、孔版）があり、木版画

は凸版に該当する【図3】。版画は、すべてではないが版と画（絵）が反転する関係にある。また、複数枚を生成したり、同一の版をもとに色調を変化させて刷ったりして、作品のバリエーションを広げられるという特性がある。多くの版画には「版をつくる」という間接的で、工芸的な表現を介在させるため、思いのまま画面に筆を走らせる絵画のような闊達さはなく、基礎的・基本的な技法を適切に身に付ける必要があり技法面での制約が生じる。今回の技法である「一版多色刷り」と呼ばれるものは、260mm×360mm、厚さ4mmのシナベニヤに自分で構成した下絵を描き、その図柄を彫刻刀で線刻を中心に板を彫っていく。このように、木版画は木板を彫刻刀で「彫る」という表現を繰り返す工芸的技術が必要となる。また、一度彫った箇所物理的復元はできないため、児童には計画性や自律性が求められる。道徳的価値の内容としては、「自主、自立」や「伝統と文化の継承」などが該当すると考えられる。

題材のテーマは、「心の楽園」または「思い出のページ」という主題である。「心の楽園」は、自分にとっての楽園とはどのような世界なのかというイメージを、様々な表象を浮かび上がらせ、繋ぎ合わせ、想像を構築していく。まだ見ぬ未来のヴィジョンを追求することが趣旨である。「思い出のページ」は、1年以内に体験した旅行などの記憶から、強く印象に残った一場面をイメージの起点として着想し、絵画表現する。趣旨の異なる主題をなぜ並列して提示するのか、そこには創造的発想力の想起における個人差から、発想が浅薄な児童へ支援的配慮として、いずれか好きな主題を選べる自由性を与え、絵画表現への意欲を喚起させるために、筆者が検討して設定したものによる。

それぞれに共通する点は、児童の内的世界の表象を源泉とし、選択する意思を与えることでイメージの開拓に自由性をもたせる。本題材では、過去の経験の想起や資料等の活用による発想の深化を重要視し、木版画という手法でいかに表すかという思考と判断の過程を重ねることで創造的な表現力が高まるのではないかと考えた。ヴィゴツ

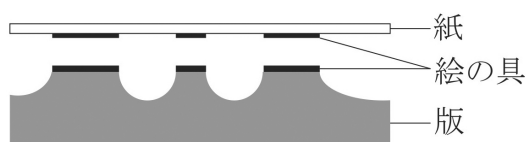
キーは「想像力は過去の心的経験の集積を参照し、統合することで新たな想像力として生まれ変わる」²²⁾と述べている。主題が「心の楽園」か「思い出のページ」かによって発想と表現の道筋は違うが、過去の経験や新たなイメージをもとに、自由に想像力をはたらかせられるこの教科でしか味わえない魅力を味わうとともに、造形表現は楽しみばかりではなく困難を乗り越えなければならぬため、自制心や努力などの道徳性が生かされていく場面が随所にある。なお、各主題の選択状況は「心の楽園」43名、「思い出のページ」16名であった。

A. 下絵の活動：テーマに基づき、ラフスケッチでイメージをつくる。この段階では想像力を広げられるよう、図鑑などの画像資料やタブレット端末、家庭から持参した写真などから素材となる情報を得る。構成が決まりかけた段階で、ベニヤ板と同寸の下絵用紙にイメージをスケッチしていく。今回は、画像が反転することを前提に下絵づくりを行った。本題材のように想像画的題材を基に制作する場合は、とくに初期段階のイメージと計画性が大切であることを実践の過程で指導していく。

B. 彫りの活動：カーボン紙で下絵を版木に写し、主線を油性ペンで強調する。単になぞるのではなく、モチーフのもつ特徴的な形態を整えながらゆっくりと丁寧に線で描き直していく。次に、彫刻刀のうち三角刀や丸刀を中心に線彫りを進める。彫刻刀を使う際には、その基本的な扱いを学習した際のワークシートを再度参照し、安全面に注意を払いながら彫る。

C. 刷りの活動：多色刷り彩色の際に何度も画用紙を開閉するため、版木からずれないようにテープで上辺を止めてから彩色へと移る。水彩絵の具を版の凸面に塗布してから画用紙を版面に下してからバレンで圧力を加えて着色する。この工程を各部分ごとに繰り返し一枚の版画ができていく。

●材料と用具：下絵用紙、版木(ベニヤ版260×360×4mm厚)、筆記具、カーボン紙、油性ペン、彫刻刀、水彩絵の具(透明、不透明)、バレン。

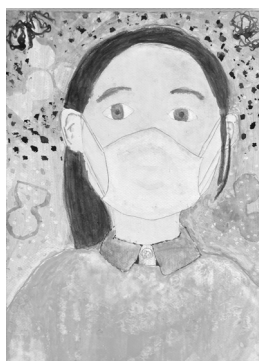


【図3】 凸版(木版画の版種)

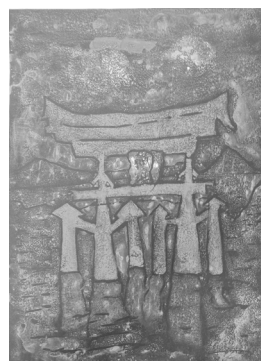
4. 授業実践の結果

4-1(1) 2つの実践における児童の表現

児童 A



【図4①】



【図4②】

児童Aは描画において想像的構成力をはたかせ、水彩表現においては水量が最も多く淡い色調を好むタイプの類型とした。

【図4①】「個性」とあるこの作品は、顔の向きを画面に向かってやや右斜めに向けている。作者は水彩による微妙な色づくりに感覚を働かせ、水の量を比較的多く用いて肌の色をはかしながら何度も彩色していた。画用紙の白や地肌の質感を大切に、淡彩の瑞々しい筆の滑りと絵の具の広がりを感じながら「つくりだす喜び」を味わっている様子が見られた。背景は淡緑色をベースに随所に白や焦げ茶色のスタンプを施し淡色にアクセントを加えようと試み、自分の姿とのバランスを考えた配色を考案していた。

【図4②】「水にうかぶ鳥居」①の制作を経て2か月後に取り組んだ木版画である。過去に旅行した広島県の厳島神社の思い出をもとに構成し、版画の制作を進めた。彩色では、①で存分に発揮したであろう水分の調節をここでも活用した。しかし今回の木版画は黒画用紙に圧力をかけて転写す

る方法で彩色されるため、従来のような多めの水分で絵の具を扱うと、圧力をかけた段階で絵の具がにじみ、本来イメージしている箇所に絵の具が付着しない点に苦心していた。水分量を減少するよう調整する感覚を掴む必要がある。

児童 B



【図5①】



【図5②】

児童 B は描画において写実的な表現傾向が最も高く、水彩の水量を調整し色の濃淡を使い分けしているタイプの類型とした。

【図5①】「自分を見つめている」と題されたこの作品は、顔の向きを画面向かってやや斜めにポーズをとり、自分の目に映る様子を全体と部分とのバランスに細やかな感覚を働かせ丁寧にデッサンを進めていた。斜めから見た自画像は真正面から捉える場合と比べて、認識したイメージを画面に再現するまでの過程におこる視覚情報の記憶保持もひとつの能力であると考えられ、絵と自分とを比べて、「どうすれば自分の個性を表せられるか」という課題意識を維持していた。彩色時も高い集中力と洞察力を保持し、固有色をベースとしながらも目に映る現実の再現だけに傾かず、随所に感覚的な色味を加えている。背景には伝統文様を装飾的に配置し、小豆色、緑青色などの色調を施していた。

【図5②】「金閣寺」1年前に旅行した京都の金閣寺の思い出をもとに構成し、版画の彫りを進めた。彩色について工夫が見られたのは、金閣寺とはいえ直截的に金色の絵の具を大量に使わず、茶褐色をベースに少量の金色を加え、書院の外壁を彩色していた。遠景の山並みは、くすんだ青緑色で表現したことが「金閣寺を引き立たせるために

遠景は落ち着いた色で表現」したという感想に成長を見取ることができた。

児童 C



【図6①】



【図6②】

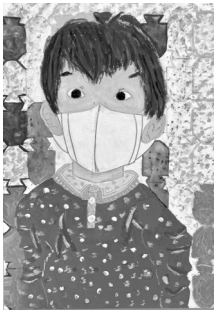
児童 C は描画において写実的表現と想像的構成力を併せ持ち、水彩の水量の調整の色の濃淡を使い分けしているタイプの類型とした。

【図6①】「いろんな色のダンス」と題された作品。画面全体に行きわたる暖色と寒色との色面がリズムカルに見えてくる。作者の目に映る等身大の自分の姿を緻密に描き出している。子どもらしい肌の質感とともに、青みを帯びた目は鋭さを湛え、あどけなさとともに複雑な感情を表す効果に繋がっている。頭髮は写実を追求した線描が重ねられている。淡彩による描画を好む作者は、色鉛筆で彩色の構想を肌感覚で掴み、手を通してざらつきのある紙質から伝わる感覚を楽しみながら、透明感のある淡彩を重ねては色鉛筆で描画を施していた。これにより、彩度の高い色調でも画面から飛び出さず、多様な色面の中間色が繋がっている、みずみずしい全体感が醸成されている。

【図6②】「スキーの思い出」(思い出のページを選択) 5年生の冬に初めて雪山で滑ったスキーの鮮やかな印象をもとに構想。自身とともに広大な雪山とリフトなどを構図に入れるために、制限のある画面の中で主役を配置している。初めてのスキー経験のワクワクする心情を対象化するように思考している。彫りの段階ではゴーグルの中のみまでを巧みに彫刻しており、彩色では色選びから混色、水加減の調整まで主体的に行うことがで

きた。雪の質感は絵の具の水分を少なくして重ね刷りすると効果的だったようだ。自画像での透明水彩と木版画の不透明水彩の表現の融合で描画表現は豊かに幅が広がり、言葉を知ることによって言語能力が高まるように、絵の具の微妙な調整力などのスキルを身に付けることで描画表現の力を確実に育んでいった。

児童 D



【図7①】



【図7②】

児童 D は描画においてイメージの空想力が柔軟で構成力には計画性と自由性が共存する。水彩の水量は少なめで不透明的表現をよく使うタイプの類型とした。

【図7①】「ほくと魚のダンス」というこの作品は、自身を向かってやや左に配置し、視線を左外に向けている。肌や頭髮、衣服を現実的な色調で描画表現するのに対し、背景は魚型の文様を反復させた構成をもとに自分の感覚を自由にはたらかせた彩色を施している。画面上半分、顎より上部はピンク味の強い肉色、何かを見つめるような目の描写に加え、背景は彩度の高い赤や黄、緑などを用いた表現がビビッドな強さを生み出している反面、画面下部の服装は緑味のある彩度の低いグレーをベースに、細やかな模様の襟やボタン、柄を色分けしながら描写している。後述の作品でも触れるが、作者は自然や宇宙への関心が高く、様々な題材にはこれらの象意からイメージを構成することに継続的な取り組みを行ってきた。本作品でも背景には単純化した一つの魚をモチーフに扱い反復させて配置した。その文様内で彩色が必要な個所は色を施し、白色の地のままでよいところには色を施していない。白色は「彩色をしてい

ない」のではなく、白色という一種の色として認識し、効果を考えて表現していた

【図7②】「アカショウビンのゆうぐれ」(心の楽園を選択) アカショウビンという野鳥を主題に、複数の川魚を向かって右側に、左上に白い鳩、画面3分の1より下に川を配置しカメなどの水棲生物を配置している。

4—(2) ワークシートによる意識調査の結果

制作後に展示会などで鑑賞を行う過程を経て、授業内で2作品を児童に渡し、改めて鑑賞と振り返りの時間を設けた。図工科指導要領で扱われている「言語活動の充実」にあるように、「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、「思考力、判断力、表現力等」を育成する観点から、ワークシートの記述をもとに言葉で思考を整理する方法をとった。前半のワークシート(以後、ワークシート1)の表題は「過去—現在—未来 図工学習カード」である。児童への質問は以下【 】内の略記記号で表した。

◆取り組んだ作品 ①自画像 ②木版画 を見て、思ったこと、感じたこと、上手くできたりできなかったりしたことは何ですか。【自画像は A-1、木版画は A-2】

◆作品①、②に共通することはどのような点ですか。【B】

◆造形の表現を通して、自分という人間にはどのような特徴が感じられますか。①よい点 ②改善するとよい点【良い点は C-1、改善点は C-2】

◆これまでの作品の表現を通して、未来の作品に生かしていきたい理想やめあては何ですか。【D】

児童 A ワークシート 1 の記述：A-1「けっこう良くてきた。髪の色や背景の色が好き」 A-2「全ての色が好き」 B「うすめの色からどんどん濃くしていき、質を高める」 C-1「すばらしいと思う」 C-2「やる気がないと何もやれない。自立心がない」 D「黒い色を表す時に、バリエーションをふやすこと」

児童 B ワークシート 1 の記述：A-1「首の部分などには少しかげがあるところとないところがあるので、そのことを考えるともう少し自分に近づけたかなと思います」 A-2「金や銀を使った部分は、あえてかすれた感じにすることでかがやいているように見えるという表現をみつけることができました」 B「実物そのままの色を使うのではなく、色をアレンジして使うことができたと思います。実物を見ると絵を見るとでは感じ方がちがうと思うので、そのことを考えながらできたと思います」

《次項へ続く》

C-1「いろいろな色をまぜて、新しい色を作ることができる」 C-2「時間かかってしまうとき、（混色せずに）そのままの色を使ってしまうこと」 D「実物そのままの色でえがくのではなく、少しアレンジして自分らしさを見せていきたいと思います」

児童 C ワークシート 1 の記述：A-1「クレヨンも使って自分の思うような色合いになりました」 A-2「水が多くてうまくいきませんでした。でも山も白だけではなく青やみどりも加えました。青も白を少ししたすと目立ちました」 B「必ずみどりや青を使っている。」 C-1「カラフルだと思う」 C-2「色をはっきりさせること」 D「色を少しずつ変えたり赤などの色も使ってみたりする。本物どおりではなく、色を変えたりどう見えるか考えたりする」

児童 D ワークシート 1 の記述：A-1「顔のりんかくや魚模様は上手くいったが、肌の色が変だ」 A-2「みやびな感じがしてきれいだが、何かわからないものがある」 B「はっきりしないものがある」 C-1「楽しくて明るい色を使うところ」 C-2「目立つようにえがく」 D「目立つものにして、見た後に楽しいイメージを思わせる作品にすること」

5. 考察

以上の分析を踏まえ、本研究では道徳的価値の内容「個性の伸長」との関連性を明らかにしようと試みてきた。「個性」という先天的な要素と後天的に成長変化していくものを、絵画におけるモチーフや色彩感覚の指向、描画表現力などを児童が自分なりに掘り下げて自己内省するために、ワークシートでは「言語による表現」から「何を言語化しているか、何を分かっているのか」と、「個性の現れとしての作品」とを突き合わせ、そのギャップとして意識していないこと、できていないことを個性のうちの「短所」として意識化した。そこに意欲が向かうことで、これまで苦手だったことができるようになり、自分の魅力としての「長所」へ成長させていく方法を各自が見出していることが確認できた。

5-1(1) 個性に着目したワークシートと分析

作品の振り返りとともに「自分の個性について考えてみよう」という後半のワークシート(以後、ワークシート2)の記述を授業内で行った。児童が理解しやすいことを考慮し、課題文中では個性の説明を「人間それぞれがもつ感覚、感性、能力。長所や短所を含めた自分らしさ」と定めている。この課題文に対する各児童の記述は以下の□内に示し、筆者から見た個性の伸長の考察を述べる。

【ワークシート2の課題文】

- ①図工での様々な表現を振り返ると、あなたの「個性」はどのようなところに現れていると思いますか。
- ②図工の表現での「個性」はどのように変化し、成長していますか。

児童 A

児童 A ワークシート2の記述：

- ①色づかい、絵画の構図、総合的に。
- ②芸じゅつ作品を見る時、どこが一番うつくしいか分かるようになった。

授業時での取り組みの様子や、作品に対する評価(言語表現や情意的な反応)から、明らかに6年生で取り組んだ木版画の方に成長を感じたと述懐していたのが児童 A であった。

彩色時は水加減が多めとなりがちなため、淡い色調の印象である分、絵の具の水分調整にはよく考えたうえで慎重な表現を施していた。また、失敗と感ずることを回避しようという性格的な面もあり、安定性のある構図を選んだり、表現する前に何度か別紙で「試す」ことを経たりして慎重に作品を成長させていく傾向が多い。こうしたプロセスは、満足のいく造形的表現のための模索の往還である。ワークシート2にあるように、「どこが一番うつくしいか分かるようになった」という言葉には、自分の心の声にしたがって様々な表現方法を模索してきたなかでしか磨かれない「美意識と個性」を見出すことができる。

児童 B

児童 B ワークシート2の記述：

- ①使う色の濃さや薄さに出ていると思います。
- ②自分で途中まで作って先生が見てくださるときに「ここをこうしたほうがいいんじゃないか」「ここがいいですね」という言葉をかけてくださると、「これからどうするこうする」と考えられて少しずつ変化していると思います。

学年の進展とともに取り組む題材の種類に幅が出てくるが、児童 B は学習態度面での意欲と高い集中力により、自分のイメージを広げ、材料や用具を自分のものにしていくことで、密度の高い作品を生み出してきた。その姿を見ていると「自助努力」という言葉が浮かぶ。こうした情意面での安定性は、たとえ高学年でも小学生段階特有の言動の未熟さが見られず、積み上げてきた道徳性が図画工作科でも生かされ、成果としての作品に現れている。主題や表現の異なる2作品を比べれば、その変化は作者であれば感じるであろうが、児童 B の場合、洞察力をはたらかせ、自己の成長や改善点を冷静に客観視して具体的な記述による

言語表現が際立ってきた。

個性に焦点を当てれば、写实的表現を追求するタイプであり、興味を抱いている日本の伝統文化に基づく文様や建造物などのモチーフを主題に選ぶことが挙げられる。ここには道徳的価値の内容にも扱われる我が国の伝統の尊重に関連するものがあり、図画工作科のよさや美しさを求める精神の育成とも相関している。ワークシート2の記述にあるように、教師の言葉がけを判断の基準として表現の手がかりとしており、指導を率直に受容し、自分なりの洞察を重ねて表現する傾向が高い。

児童 C

児童 C ワークシート2の記述：

- ①生き物などの顔がやさしい顔になったり、あまり赤などを使ったりしないところ。
- ②こまかいところまで気を使ったり、少し明るい色を入れてみたり、好きな色だけではないものを使って、興味を持っていることをテーマにしたりする。

児童 C は造形表現活動全般に高い学習意欲を持っており、どのようなテーマの題材にも自分の感覚的な心象が具体的なイメージとして形づくられるまで、模索と探究を繰り返すことができている。

創造の先にある一滴の成果のみが個性ではなく、テーマをどう捉え、どう感性を働かせ行動するか、すべての過程に本人の個性がちりばめられている。児童がワークシート1で述べていたように、「本物どおりではなく…」という点に気付いていることから、目に見えるありのままを再現的に描画することが絵の終着点ではなく、具体的な対象にも作者の主観的な感情を形や色に託して表現できる、絵画の表現に許された大きな自由性への発見が見られている。

児童 D

児童 D ワークシート2の記述：

- ①いろいろなものが登場するところ。前向きな作品になるところ。
- ②中身にあわせて静かな場面を表現できるようになったところ。でも、個性の根本は変わっていない。

柔軟な想像力に基づき、大局的な構造とディテールとの調和を主旋律として、幅広い色調の選択により彩色表現を行うタイプである。

児童 D は、材料や用具と親和性が高く調整力が高い、いわゆる器用なタイプである。自身の感覚的思考力・判断力で、扱う物的材料を表現力へと転化させていく能力が認められる。

自画像においては、制作の過程で背景の模様と自分の姿のバランスが崩れてきたことを感じたら、スポンジなどに絵の具を塗布し、背景部の強さを抑えるように強弱を制御している。木版画においては、同一画面に8種ほどの生き物を配置するが、それらの姿形や表情に目をやると、「気持ち」「他の生き物との関わり」などを見出せる。これまでの題材を見てきても、キーワードには「共存」「協調」があるようで、主題を単独で絵のなかに配するのではなく、周囲との関係で築く調和した世界を好んで、主題や背景の表し方を考えている。周囲の環境や他者がいるなかでの自分を意識することは、道徳的価値としても関連するものである。児童 D のこうした能力は無意識であり生得的なものであるかもしれないが、ここには造形感覚と道徳性との融合を見ることができる。明るくにぎやかな共存世界をつくってきた作者は次第に静かな場面を表現できるようになった。「でも、個性の根本は変わっていない」という言葉には、多面的に成長した視点を見出せよう。

6. 成果と課題

本研究で見えてきたことは、授業姿勢や作品に対する満足度の高い児童は、建学の精神（道徳的価値）を大切にして、その意味や価値を自分ごと

と捉え、学校生活で実践することを通して得た多様な経験を、確かな造形的表現として「粘り強く」結晶化させているということである。道徳的価値、道徳教育を受容し、題材への取り組みという形だけで終わるのではなく、自身の中で新たな生命体としての作品へと再構築し、生活の中で創造、発展させて諸場面で生かそうとしている児童には精神的な安定感と「粘り強さ」が生まれる。その結果、どの教科に対しても選別意識を持つことなく、また様々な題材に対し懸命に取り組むことで、自分の個性が相応に開花し、伸長していくと考えられる。

「美的価値と人間の生き方および美の味わい」²³⁾とあるように、よりよいもの、より美しいものを創造し希求することが道徳的な価値をもった教育のひとつである。作品に対する出来栄への自己評価が高く、高学年としてこれまで手探りを重ねながらも学んできた道徳的価値を基に、将来的にも創造性を培いながら個性を築き上げていくと考えられる。

課題として、本研究では「個性の伸長」という観点から児童の考えや思いを見取るため、一律にワークシートを使用したのが、制作してから時間的な間隔が空いているうえ、表した作者でさえその過程の記憶や気持ちを辿って文章化することは困難であった。制作時から成長しているゆえに、過去の作品を直視できなかったり、変化に気が付いても言葉にできなかったりする不満、気分によって過大・過小評価することも起こりうる。児童自身の分析だけでは考察対象として脆いため、長期的に指導に当たっている筆者の視点で、何ができていて何を課題とし、どう乗り越えようとしているのかを見取っていくことは相応の努力を要した。また、成長の度合いには当然ながら個人差があり、心の中ではわかっていることでも語彙が足りず、筋道を整理して文章で表現することは、高学年とはいえ容易なことではない。自己評価による作品の満足度は高くとも、ワークシートの記述は単語の羅列であったり「わからない」という表現が連続したりするため、判断には洞察力が必要となる。

結論として、成長とともに自分を客観的に振り返ることができ、言語活動で心の中を表現できる児童には、描画に見られる造形的表現においても、対象や事象との実感を通した関わりを「調整」しながら自分の栄養として着実に身に付けていく。例えば水彩絵の具の混色や重色、水加減、形態の捉え方など様々な方法で調整することができているという共通点が見られた。図画工作科で培ってきたこうした能力と、自身の内面に形成される道徳性とは、どこかで融合し、互いに深化、補充し合って人格形成に繋がっている。物質の飽和と大量消費のなかにある子どもたちに、物の有難さをどのように伝えていくか、学校教育の課題は残るが、初等教育段階での貴重な学び合いの機会は、まさに「人・物・時を大切にすること」などの道徳的行為の繰り返しによって人間としての層の厚みが年輪のように広がると考えられる。図画工作教育を通して自分にしかない個性を見つめ、伸ばしていける児童を育成するために本テーマの研究をさらに追求したい。

引用文献

- 1) 降旗孝「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素 ー目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて」美術教育学研究 第48号 2016 p.371
- 2) 波多野達二・三宅茂夫著『新しい教職課程講座 教科教育編7 図画工作科教育』ミネルヴァ書房 2019 p.8
- 3) 佐藤洋照・藤江 充・榎野 匠(編著)『図画工作実践ガイド』日本文教出版 2019 p.13
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』2017 p.12-13
- 5) 大島裕・中島朋紀『ともに考え深めよう！新たな道徳教育の創造』一藝社 2019 p.58
- 6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』2017 p.10
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』2017 p.84
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』2017 p.89-90

- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 p.113
- 10) 松村明・三省堂編修所編『大辞林(第4版)』三省堂 2019 p.992
- 11) 新村出編『広辞苑(第7版)』岩波書店 2022 p.1063
- 12) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 p.114
- 13) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 p.113
- 14) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 p.113
- 15) 青木善治「互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成に関する教育実践研究～対話による美術朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して」美術教育学研究 第54号 2022
- 16) 栗山裕至「美術教育における〈個性〉の解釈—『学習指導要領解説』における位置づけの考察—」佐賀大学 2012
- 17) 永田茂雄(編著)『小学校新学習指導要領の展開シリーズ 特別の教科道徳編』明治図書 2017 p.56
- 18) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』2017 p.34
- 19) Victor Lowenfeld 著 竹内清・堀内敏・武井勝雄訳『美術による人間形成—創造的発達と精神的成長』(Creative and Mental Growth)黎明書房 1963 p.237-318
- 20) 日本色研事業株式会社の製品
- 21) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 p.89
- 22) ヴィゴツキー著・広瀬信雄訳・福井研介註『子どもの想像力と創造』新読書社 2021
- 23) 大島裕・中島朋紀『ともに考え深めよう!新たな道徳教育の創造』一藝社 2019 p.57

高学年児童を対象とし、絵画・版画の2題材の表現過程と、ワークシートによる作品鑑賞及び自己評価等の内省を通じて、「個性の伸長」の状況を主観と客観の往還的視点で把握した。その結果、道徳的価値に基づく向社会的意識をもち、学習に対する一定の「粘り強さ」や「調整力」をもつ児童は図画工作科の造形的表現でもそうした諸能力を働かせ、自身の個性の変化や伸長に気付く見識を生かした充実度の高い学習成果の顕現が認められた。

(2023年9月25日受稿)

要旨

本研究は、小学校図画工作科の学習活動における「個性」の変化への気付きと、道徳的価値の内容のひとつである「個性の伸長」との関連性について、その教育的可能性を実証することである。